

産業懇談会

会員の相互啓発、情報交換を通じ親睦を深める場に

「産業懇談会」は、14グループ(1グループ40～70名)それぞれが、定例日にランチョン・ミーティングを開催している※。メンバーからの話題提供を中心とした情報交換や、時宜を得たテーマに基づく外部講師との意見交換を行っている。さらにグループごとの見学会や懇親会も開催し、会員相互の親睦を深める場としている。

※定例日：第1火曜グループ→毎月第1火曜日 12時～13時45分開催(8月休会)



産業懇談会例会紹介(第3火曜グループ7月例会)

7月に開催された第3火曜グループ例会では、三井文庫常務理事・文庫長の由井常彦氏を招き、日本工業倶楽部の歴史を中心に、昭和期の経済団体と経済同友会の系譜について興味深い話題が提供された。

由井常彦氏(財団法人三井文庫 常務理事・文庫長)の講演概要 テーマ：「戦後財界団体と財界人」

日本工業倶楽部は三井の団琢磨氏(三井合名会社 理事長)が中心となって、大正6年(1917)に発足しました。特筆すべきは、昭和4年(1929)に第二回万国工業会議が日本工業倶楽部で開催されたことで、これによって、日本の企業と世界の有力企業との間にさまざまな提携が結ばれました。しかし、昭和7年に血盟団事件により団琢磨氏が暗殺されます。また、その約1か月前には、井上準之助元大蔵大臣が暗殺されるなど、当時の政界・財界をめぐる情勢は非常に暗く、緊迫したものでした。しかも当時の財界は、左右両勢力から攻撃を受けていました。団氏の死後、財界は受難の時代を迎え、そのまま終戦を迎えます。

戦後は、GHQが財界活動を認めま

せんでしたが、徐々に軟化し、昭和21年に経済同友会、経済団体連合会(経団連)、昭和23年に日本経営者団体連盟(日経連)が設立されました。経団連は、欧米にも例がない団体で、業界団体の集まりというのは統制経済の名残で、戦時中に化学工業統制会の会長をしていた石川一郎氏(日産化学工業 社長)が初代会長になりました。諸井貫一氏(秩父セメント 社長)は労働問題を担当し、日経連初代会長に就任、経済同友会設立にも関与し、経済同友会初代表幹事となっています。宮島清次郎氏(日清紡 会長)が、日本工業倶楽部の理事長となり、戦後の日本工業倶楽部は「財界の奥の院」と称されました。

設立当初の経済同友会は、東大経

済学部の影響を受け資本主義に対して批判的な風潮があり、大塚万丈氏(日本特殊鋼管 社長)は労働組合を経営に参加させるドイツ的な資本主義を提唱しましたが、あまりにもラディカルであるとしてこれは機関決定されませんでした。しかし、経済同友会はメンバーが自由闊達に意見を述べる雰囲気があり、戦前の日本工業倶楽部の理念的な部分を継承したと言えます。特に、労働観、福祉観には先進的なものがあり、また貿易の自由化や教育問題にも力を入れるなど、非常にバランスの取れた財界団体と言えます。



産業懇談会14グループ合同の暑気払いを開催

産業懇談会は7月28日、霞が関の霞山会館で14グループ合同の暑気払いを開催した。桜井代表幹事および、池田守男(資生堂 相談役)・高橋衛(ドイツ証券 常勤監査役)両代表世話人の挨拶の後、多くの会員が和やかな雰囲気のもとで楽しいひと時を過ごした。



池田守男 代表世話人

産業懇談会は、会員の相互啓発、情報交換等を通じ、交流を深めることを目的として、昭和49年(1974)に発足し、5グループ165名でスタートしました。今では14グループに分かれて、グループごとに活動を展開しています。産業懇談会での活動を土台にいただき、委員会活動等にも積極的に参加していただきたい。



高橋衛 代表世話人

現在、全会員の約6割の754名の皆様にご登録いただいています。各グループごとにメンバーの好奇心を満たすような定例昼食会を毎月開催し、そのほか夜の懇親会や見学会、ゴルフ会など、交流が深まる会合を企画しています。まだご登録されていない方は、ぜひご参加されて、会の楽しい雰囲気を味わっていただきたい。